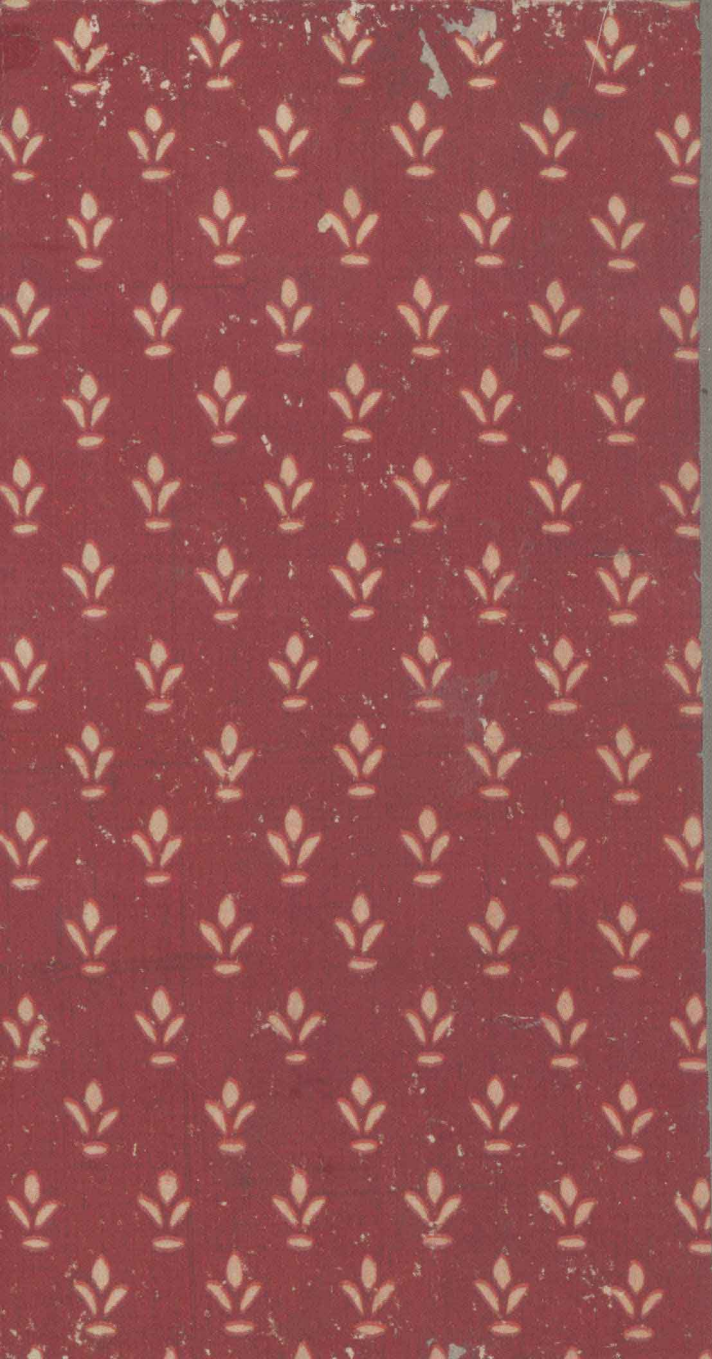




今昔

森田たよ著

暮しの手帖社版

落丁亂丁などありましたらいつでもお取りかえいたします

今昔 定價貳百參拾圓

昭和貳拾六年拾月拾三日印刷 昭和貳拾六年拾月拾五日發行

著者 森田たま

發行者 大橋鎮子 東京都中央區銀座西八丁目五番地

發行所 暮しの手帖社 東京都中央區銀座西八丁目五番地

印刷者 青山與三次郎 東京都港區芝愛宕町二丁目八五番地

印刷所 青山印刷株式會社 東京都港區芝愛宕町二丁目八五番地

表紙印刷 鈴木信司 製本 佐藤賢一郎

目次

東のきもの西のきもの	三頁
なづな花咲く	十一頁
長じゆばん	十九頁
着物への別辭	二十五頁
雜談	三十七頁
小鳥の巢箱	四十三頁
田舎家	六十頁
小鳥來る日	六十五頁
夜半の友	七十頁

女の敗北	百三十四頁
青春	百三十七頁
南の花々	百四十頁
しら露	百四十五頁
愛惜	百五十頁
師走の歌	百五十八頁
日記帳	百六十五頁
新年の山	百六十九頁
日本の雪	百七十三頁
四季に添うて	百七十八頁
藤棚	百八十二頁
白いふねの人々	百八十五頁

[illegible]

今昔

東のきもの西のきもの

これは着物といふものが皮膚のやうに、また家の中の襖、障子のやうに、われわれの生活にびたりと密着してゐた頃の話である。

大正十二年の震災で、私ははじめて關西の土を踏んだ。夫の生家や親戚から、危ない東京に子供を置かないで、大阪へ歸つてくるやうにとすめられた結果であつた。危険な時は過ぎてゐたが、何となく世の中が荒んでゐて、子供のためにはしばらく東京を離れた方がよいやうに思はれた。

災禍にあはぬ大阪の町はがつしりと、町に沿うて土藏づくりの家が建ちならび、デパートへ行つてみると、賑やかに秋の百選會がひらかれてゐる。焼け跡の東京から來た者の眼には、眩しいやうな華麗さだつたが、おどろいたのは陳列の帶地、反物に、一つ一つ出品者の

名前が添へてある事で、子供の頃によく見た郷里の共進會を思ひ出させた。東京のデパートにも陳列會はよくあつたが、出品者の名前など一度も見た事はないのである。さうして更らに驚かされたのは、見物の老若男女が、一つ一つ品物と名前をていねいに見比べて、ちやうど畫の展覽會にでも行つたやうに、あれこれと批評し、うなづきあつて見て廻つてゐる事であつた。

京都の西村といふ染屋は本家と分家で、千總ちきう、千々ちぢとわかれてゐる。遠來者の私の眼には、おなじ好みの友禪とよりうつらないのに、土地の人は大てい見分けがつくらしく、千總にしてはちよつと色が濃いとおもたら、やつぱり千々でしたなといふやうな事を話しあふ。矢代のお召はいつ見てもよろしおまんなといふ。帯は龍村はん、川嶋はんと云ふ、さういふ中には東京の「大彦」の出品もあり、東京ではきいた事もないのを「大彦はんはすつぱりしてまんな」と、大阪の人は親類づきあひに云ふのである。

濱ちりめん、丹後ちりめん、目方がいくらで、よりがどうでと、大阪の人はみんな呉服屋から生れてきたのかしらと、私は思つた。この着尺は七へんより染めてないとか、十三べんかかつてゐるとか、ぼかしの具合がどうのかうの、金糸が本金であるとかないとか、まつた

く私は、眼のまはる心地がした。私たちが八百屋へ行つて野菜を買ふ時、練馬の大根、三河嶋菜、目黒の筍と云ふやうに、大阪の人の生活には着物もおなじ程度に、深い根をおろしてゐて、ちよつと見てくれのいいものに飛びつくといふところはさらさらない。

そのくせ新しいものを流行らせるのも關西で、あのアツパツパ、東京で改良されてホームドレスとなつた夏の簡單服を、いち早く採用したのは關西であり、そのほか家庭用品でも、便利で經濟とあればたちどころに、電氣冷蔵庫、電氣洗濯機、台所の電化を軒並みにはかつてゆく。共同一致の精神が旺盛である反面には、ぼかしの羽織がはやれば誰も彼もぼかしの羽織、黒に染めて裾だけ色ぬきし、黄いろい色にどふりとつけた金貳拾圓也のお羽織を、われもわれもと着て歩くのは、近頃の銀座街頭で、レーヨンギャバジンの紅や緑、そのつぎはコーデュロイ、みんなおんなじ色やら生地やら、それを着なけれや一人前でないやうに得々としてゐるのとよく似てゐる。二十年前の關西氣質が、いまの銀座を風びしてゐるのであらうか。あれほど詳しく地質や染めを知つてゐながら、さてその着物を仕立てて着るとどういふわけか關西の人はどれもこれもおなじやうで、つまり個性がない、と云つては關西の人の怒りをかふかもしれないが、大きな見地からすれば民族性がゆたかであるとも云へよう。ア

メリカ人と關西人とは何となく共通したところがあるやうに思はれる。

それで、東京の人はさしあたりパリジャンかイギリス好み、といふ事になるとすばらしいわけだけれど、さうもいかない。まあしかし、理想としては巴里の地味さと華やかさを體得してゐたやうであつた。東京の女はちりめんの種類も目方も、染織者の名前も知らなかつたけれども、何となく自分に似合ふものをえらぶセンスは持つてゐて、お隣のおくさんがグリーンだから私もグリーンといふところはなかつた。むしろその反對に、お隣がグリーンなら私は茶の方をと、本來はグリンの似合ふ人であつても、それを捨ててまでべつの色をとるといふ氣風があつた。人まねと思はれるのを何よりきらつたのである。

とめ機はたといふのがあつた。一反だけ自分の好みの柄を織らせるのである。しかし機はふつう二反から四反、六反といふ風になつてゐるので、できあがつた全部を買ひとるか、あるひは今年一年だけ賣りさばきをとめさせるのである。つまり一枚の着物に何反分の代償を拂ふので、ひとには普通の着物とより見えないけれども、實は日本ちゆうに自分一人より着てゐる者がないといふ事が味噌で、そのためには高い代償も惜しまないのであつた。私も一度そんなまねをした事があるが、しかし私の場合は、ひきとつた反物は残らず親しい人に贈つ

たので、自分一人だけ着てゐるわけではなかつた。

關西の女は、かういふ無駄なお金はつかはない。自分一人だけいい氣になつてゐたところで、はたから見て何の奇もないお召の着物一枚に大金を投ずるなど、狂氣のさたとより思はれぬ。お金をかけたらかけたやうに、ふらんすししゅうのぬひとりなどおかせて、ええべべ着てはると、一ト眼で立派さがわかるやうなものをつくるのが常識で、さういふ点、ものの考へ方がまつすぐで素直である。東京の女のやうに、人しれすこつそりたのしむのを、澁いとか粹とかよろこぶやうなひねくれたところがない。

色の好みは、關西人に云はせると、東京の人は派手といひ、東京の方に云はせると、關西の人は原色ばかり着てゐるとけなすけれども、いづれも皮相の觀察で、空の色・土の色との調和があり、いづれをどうとも云ひきれぬ。總體に關東は紺を基準とし、關西は茶を基準としてゐるのではあるまいか。藍みぢんは東京の襖、障子によくあふけれど、關西では落着かない。壁の色からしてちがふせゐである。あゐを派手とし、茶を澁いとするなら、關西が澁い事になるけれども、男の洋服の色合では、グリーンやブルウや、昔から派手なものを見かけるのは、あくまで青い空の色と、白い土のせゐではないかと思ふ。若い令嬢の上品な紫も、

東京は江戸紫、新紫、藍の勝つた色であるのに、關西は古代紫の紅のかかつた、牡丹色に近いほどのがよろこばれ、おつとりとあたたか味のあるのにひきかへて、東京はどこまでも、きりりとひきしまつた色をとる。

着物の仕立は、關西の方が親切で、着やすいやうに出来てゐた。袖附にほころびの來ぬやうに、細いふくりんがとつてある。いまでは東京でも、さういふ仕立を折々見るが、しかし私は、もしほころびが切れるなれば切れるままにといった風の、東京仕立が好きであつた。長じゆばんも、關西は衽をとつて、別衿がつけてあつて、着やすい事は着やすいけれども、着物とおなじ仕立は曲がなく、私はやはり裾まで衿のついてゐる東京風をよしとする。羽織、着物、帶、長じゆばん、ひつくるめて一つの姿ができあがるものとすれば、長じゆばんが着物とおなじ仕立であつては、風情がなさすぎる。

長じゆばんといへば思ひ出されるのは關西では着物や帶に張りこむわりに、長じゆばんの粗末な事で、その上、十枚の着物に一枚の長じゆばんで、平氣でとほすくせがあり、私はそれが氣になつて、身内の若い人たちに、長じゆばんだけはいいいものを着て下さいねと、うるさく云つたものだつた。着物をうまく着るコツは、長じゆばんをきつちり着る事だよく云

はれるが、着附ばかりではなく、着物の真髓も長じゆばんにあると、私は考へる。ほんのちらりと袖口にのぞくだけのものだけれども、長じゆばんにしつかりしたものを着てゐる事は、ほんたうに着物を着たといふ感じを抱かせ、その人を落着かせる。何かのはずみで、不意に着物をぬがねばならぬやうな事があつても、長じゆばんがちゃんとしてゐれば、退け目を感じる事がない。

おなじやうに肌着も大切で、これはさらしの肌じゆばんの、いつも清潔なのを身につけたい。肌着のえりにほそく紅絹のきれをかけるのを、女らしくてよいとはやつた事もあるやうだが、私はとらない。肌着はどこまでも純白なのが美しく、さうしてさぶさぶと洗濯するのが第一ゆゑ、衿はさらしのままでさしつかへなく、よそゆきなれば白絹、羽二重の白をかけ、汚れたら捨ててしまふ。洗つた羽二重の黄いろいのをかけておくなら、さらしのままがましである。

東京の女の特徴は、安いものでも品よく着る事で、パリの女が安いきれでもよく似合ふ服をつくるのと、一脈通するところがあつた。だが戦争ちゆう美しいモンペをはいたのは京都で、紺がすり、紫のぼうせきがすり、黄と緑のだんだら縞の紬のモンペなど、それぞれ似合

ふ柄のを着て、朝の道路を掃いてゐたり、八百屋のくるまをかこんでゐたりした。旅先きに
ちらりと見た印象だつたが、忘れぬ思ひ出を残してゐる。